

# 英語科授業構成力を育てるための教材開発の試み

山口大学 深 沢 清 治

## 1. 本研究の動機

教科教育の豊かな実践を将来の教師に保証することは、教師教育にとって重要な課題である。しかし、実習後の学生あるいは卒業生から「大学で習ったことは授業では役に立たない」ということばを耳にすることがある。大学での教職専門科目に属する英語科教育法の授業においては、これまで実習・卒業後の教室実践を想定しながらも、ややもすれば講義形式での知識注入型の授業に偏りがちとなり、実践は教育実習での現場実践の中から、あるいは、卒業後に得られるものと期待されることが多かった。将来の教師に求められる能力を育てる教師教育は、実践を無視した原則・理論の理解や、実践への即効性を追求するだけの技術訓練のみでなく、将来、置かれた環境に対応しうるように理論と実践の融合による原則に基づいた応用力養成でなくてはならない。そこで、大学教育方法改善プロジェクトの一環として、教育実習を迎える事前準備の段階で実践的な授業設計・実施能力の基礎を育てるために、指導過程別に授業例を紹介、解説、検討しながら授業の「型」づくりを目指した教師教育用の教材開発を試みた。小論は、教師教育用の教材開発に至る中間発表である。

## 2. 教師教育の視点——training vs education

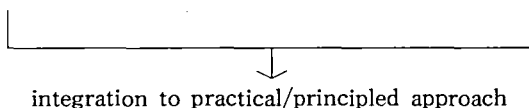
教師教育の目的に対する視点の一つに、以下のように training / education という二分法がある。概して、大学においては、「大学は技術訓練の場ではない」という考え方から、後者の education としての立場を取り、理論中心に、実践は教室での経験を通して得られるという考えが主流であった。それは、Brumfit (1985: 130) の指摘するように、教師教育は、場面場面での対処術よりも、原則に徹するという考え方が一般的であったからである。なぜならば、ある特定場面に向けての技術訓練を受けた教師が、将来、同じ環境に出ていくわけではないからである。ところが、ここでいう原則とは抽象的一般化ではなく、あくまで実践に根ざし、あるいは良い実践を生み出す原則でなくてはならない。諸家の考えをもとに教師教育を training / education という両極に大別すれば、次表1のようになる。つまり、training とは、訓練目標そのものの達成が目的となり、実践を個々の技術に分け、スキルの修得により型にはめようとするのに対して、education としての教師教育は、訓練のプロセスをあくまで目的のための手段ととらえ、個々の技術のように分けられるものではなく、全体として効果的な教授能力を養成し、創造性、判断力、順応性を強調する、というように対比される。また、両者の問題点としては、まず、training では、小手先の技術論に終始することや、あるいは原則の欠如により個々の教師が生徒の実態など、環境の変化に対応できないことが考えられる。それに対して、education に偏れば、言語あるいは言語教育とは離れた、あいまいな理論化や問いかけに終り、実践との関連性の不足が懸念される。

教師教育コースにおいてはこのどちらの極端でもなく、両者を統合する努力が必要である。これまでは、主として education を中心に教科教育法が生まれ、その実践への応用は教員志望学生に任されてきたが、それが期待通りに学生自身のなかで同化、統合されてきているのだろうか。従来、理論から実践へというアプローチに対して、両者を統合し、実際の問題を出発点として、その中から理論的な探求を行っていく、実践から理論へ深めるアプローチも考えられてよい

(Widdowson 1979 : 68)。

表1 Training / Education としての教師教育

	training	education
aims/features	ends in themselves microperspective analytic imparting skills imposing a conformity	means to an end macroperspective holistic developing abilities providing for creativity
danger	reduction of EFL to a collection of tips and anecdotes, a lack of adaptability to changing circum- stances because of an absence of underlying principles.	vague theorizing and an open ended enquiry into anything remotely connected with language and education



### 3. 教師教育プログラムに望まれるもの——教育実習後の学生の意識調査から<sup>1)</sup>

それでは、教育実習まで教師教育を受けてきた学生たちは、そのプログラムについてどのような感想・意見を持っているのであろうか。教育実習あるいはその事前指導の改善のために山口大学教育学部の教育実習研究委員会が2年間をかけて行った調査によれば、学生たちは教師教育プログラムについて、理論偏重への不満を述べ、実習前の教師教育は実践を知らない者にとっては一方通行であると考えている。以下、アンケート項目から回答を拾ってみる。

まず、「大学教育のなかで教育実習に役立った授業がありましたか？」という設問に対して、特定の教科に言及したものではないが、「役立った」とする意見が全体の70%ある反面、各分野別に見れば、教職科目(29.6%)、中学校教科専門(7.9%)、中学校教科教育法(11.9%)ということも厳粛にとらえる必要がある。そのうち、中学校教員養成課程の学生は教科教育法の授業に関して、指導過程の理解、授業案の作成、模擬授業の実施、などを役立った点としてあげている。

また、次のような授業改善に対する要望もある。

(設問) あなたは、教育実習にむけた、より実践的な講義科目を、新たに設ける必要があると思いますか？

#### 1. 思う(73.6%)

- ・現在の講義には実習や現場で役に立つ講義が少ないから。
- ・実践的な力を身につけて実習に臨みたいから。
- ・直接教育現場に触れたり、実際に活動(体験)する機会が少ない。
- ・短時間の実習をより効果的にするため。

## 2. 思わない (16.6%)

- ・現在の講義内容を改善すればよい。
- ・実践的な力は講義では身につかない。

この結果から、実践力をつけることへの願望、および、実践的・实际的な講義内容を望む声が聞こえてくる。受講者の感想・意見をもとに今後、教師教育において、特に教科教育法においては、何を盛り込むか、さらに、何をどの時期に順序立てて与えるのか、という内容と構成について再考する必要があるといえよう。

## 4. 教育実習事前指導のための教師教育用ビデオ教材開発の試み<sup>2)</sup>

### (1) 事前指導の目的・内容・構成

そこで、教育方法改善を目指して、特に英語科教育法の授業の内容と構成について考えた。教師教育プログラムをスキーマ化しようとするEllis (1986: 93) によれば、教師教育は experiential/awareness raising に分けられるとしている (図1)。

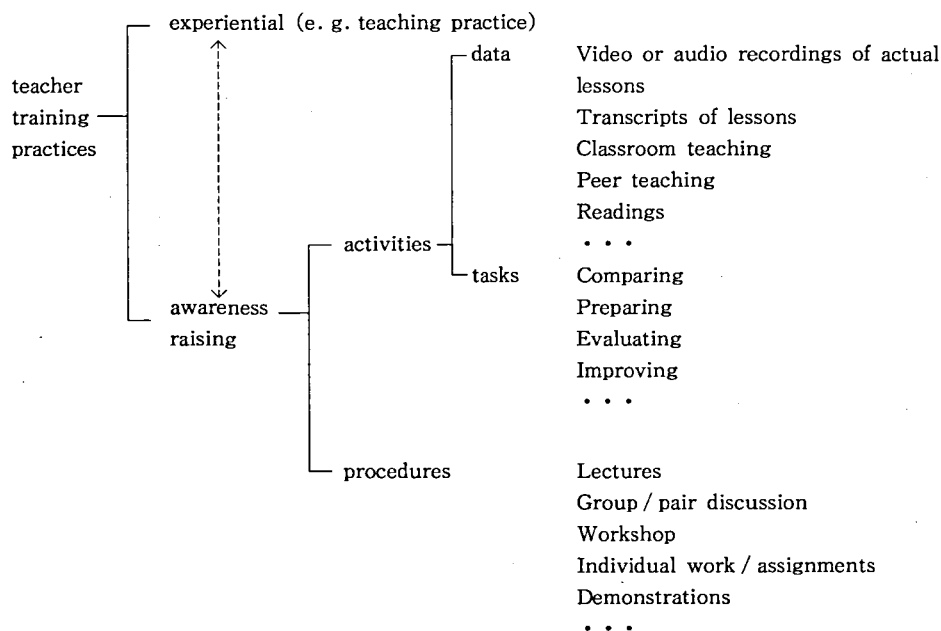


図1 An outline of teacher-training practices

我々に関わるのは、そのうち後者の意識化の段階であろう。Ellisによれば、上図1の activity は、簡言すれば教師教育のための広義の教材であり、そのもととなる資料と、それをもとに学生が取り組む課題により構成される。そして、教科教育法を担当する大学の教師がどのような指導方法・形態を用いるかが、procedureとなる。これによれば、従来の、英語教育関係の教科書を与え、講義により解説し、時には考えさせる、という形式だけでなく、さらに多くの授業方法を導入する可能性がある。

また、特に内容の構成・順序づけに関して initial training としての学部生のレベルでは教室の実践を中心として、アプローチ、シラバス、教材作成などは、より経験を積んだ時点で必

要になるとして、図2のようなピラミッドも示されている (Brumfit and Rossner 1982 : 230)。

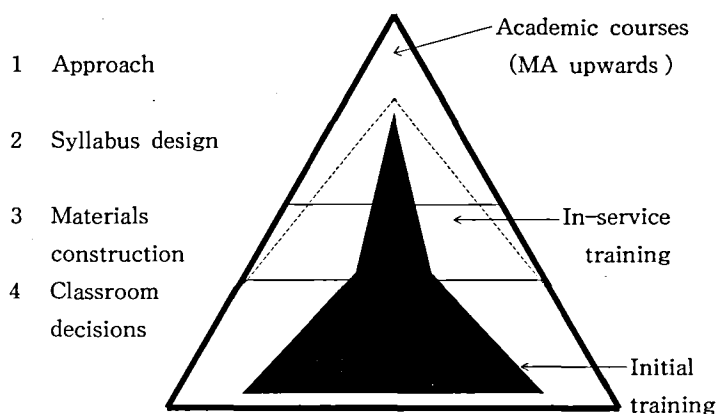


図2. Areas of appropriate concern for different types of teacher training

これは、アプローチに関する理解が不要というのではなく、まず、教室活動から始めるほうが、高次のレベルでの決定が、教室実践のレベルの決定と密接に結び付いていることを知らせるために重要とするものである。少ない授業時間で、より効果的な教師教育を行うためには、内容・構成の面から改善の努力が必要である。

## (2) 授業設計・実施能力を育てるための教材開発

そこで、これまで述べたことから、特に教室レベルでの実践を中心とした内容をもとに授業構成を考えるための教材開発を試みた。Ellis (1986) をもとに考えられる教材としては、ベテラン教師の授業、あるいは学生の microteaching のビデオ・テープが資料となる。これらをもとに、いろいろな分析・評価の課題を与え、指導法としても、講義一辺倒ではなく、個・グループによる学習も考えられる。これにより、学生たちが教材研究、授業案作成、教具・資料作成、そして、授業実践・評価など授業構成にかかわる諸活動を自主的に進めることを助けるための具体的教材・資料として活用することを目指す。

また、もうひとつの特徴として、従来、授業ビデオテープは、一授業を通して視聴されることが多かったが、各指導過程における指導技術の選択の可能性を意識させるために、教材作成手順として一単位授業を①復習、②導入、③理解、④定着・展開、⑤整理、の5段階に分け、『指導法ハンドブック』の区分により、158の細分化カテゴリーを作った。授業をいかに進めるかを考える際には、指導の過程で行うひとつひとつの作業内容が問題であり、それらの「型」が組みあわされて「指導過程」全体の型が生まれるということが出来る。教授活動のアウトプットに対する授業分析は、時には教えていないことまで分析するのに対して、ここでは事前指導において採用可能な限りの指導形態・技術を意識させるためのインプットとしての教材開発を目指し、実践力養成に役立てたいと考えている。

先に述べた5つの指導過程のうち、①復習については、表2の15の活動が考えられるが、これが全ての活動を網羅しているという訳ではない。これにより、学生たちが教材研究、授業案作成、教具・資料作成、そして、授業実践・評価など授業構成にかかわる諸活動を自主的に進めることを助けるための具体的教材・資料として活用することを目指す。

表2 指導過程別細分化カテゴリー I 復習 [例]

### 1. 語・句についての復習

- (1)実物・写真・絵などを使って、語句の復習を行う。
- (2)フラッシュ・カードを見せて、読ませ、書かせる。
- (3)語句を使って、短文を作らせる。
- (4)語形の変化を言わせる。
- (5)連語の変化および表現をまとめさせる。
- (6)つづりを言わせる。

### 2. 文法・文型についての復習

- (1)文型練習 (Pattern Practice) を行う。
- (2)実際の場面の中で、文型・文法事項を活用させる。
- (3)口頭作文 (Oral composition) をさせる。

### 3. 内容についての復習

- (1)テープ・リスニング
- (2)本文の内容に関する英文について True か False か判断させる。
- (3)本文の内容について英問英答を行う。
- (4)教師あるいはテープのあとから英文をくり返して言わせる。
- (5)本文を暗唱させる
- (6)教師が英文を読んでそれを書き取らせる。

青木・池浦・金田 (編) (1983)、垣田 (編) (1978)

## 5. 今後の活用の方向

最後に、作成した教材の今後の活用の方向を考えてみたい。これらは、先述のとおり、模範的教授行為を提示するためのものではなく、特定の指導過程における指導技術選択の可能性や、それぞれの効果、およびある活動を選択するための原則を意識させる助けとなるもので、学生たちの自主作業による授業構成力の養成をねらうものである。Education にやや偏った教師教育を、少し training に寄せることにより、大学での教師教育から実習以後への授業構成力・実践力への橋渡しになると考えられる。豊かな授業実践を保証するためには、教員養成の授業を内容・構成の両面から、理論と実践をつなげる努力をする必要がある。

今後の課題として、事前指導の進度に合わせて、Britten (1985) のいう trainer dependence から self reliance へと教えることと自主活動の割合をいかに変えていくかという、構成の問題を考えていかねばならない。

[注1] 山口大学教育学部教育実習研究委員会報告書『教育実習の改善について』(1988)による。

[注2] 本研究は昭和62年度大学教育方法等改善経費の助成によるものである。

## REFERENCES

- Britten, D. (1985), Teacher training in ELT: Part 1 & 2. *Language Teaching*, 18, 112–128; 220–238.
- \_\_\_\_\_ (1988), Three stages in teacher training. *ELTJ*, 42, 1, 3–8.
- Brumfit, C. (1985), Integrating theory and practice. in C. Brumfit (1985), *Language and literature teaching: from practice to principle*. Pergamon Press. pp.129–138.
- Brumfit, C. and R. Rossner (1982), The 'decision pyramid' and teacher training for ELT. *ELTJ*, 36, 226–231.
- Ellis, R. (1986), Activities and procedures for teacher training. *ELTJ*, 40, 2, 91–99.
- Richards, J. (1987), The dilemma of teacher education in TESOL. *TESOL Q*, 21, 2, 209–226.
- Widdowson, H. G. (1979), Notes on educational/vocational aspects in EFL diploma courses. in the British Council, *ELT documents 104: Developments in the training of teachers of English*. pp. 66–69.
- \_\_\_\_\_ (1983), *Learning purpose and language use*. Oxford University Press.
- 青木昭六・池浦貞彦・金田正也（編）（1983），『英語指導法ハンドブック③〈指導技術編〉』。大修館書店。
- 垣田直巳（編）（1978），『英語指導法ハンドブック②〈授業類型編〉』。大修館書店。